自治会等と連携した地域一体型サービスの実施

社会福祉法人 成光苑
岩戸ホーム 施設長　**藤 原 義 章**（老－23期）

法人・施設の概要

社会福祉法人成光苑は、初代理事長が終戦の混乱期の中、「子どもたちを何とかしなくては」との思いから始めた託児所が保育園として認可され、今年で60年になります。現在、大阪府内に保育園を6か園、大阪府内と京都府内に老人施設、高齢者優良賃貸住宅等6施設を設置し、これらの施設を中心に約50の事業を展開しています。法人理念の1つとして、「地域に開かれ、愛され、地域の拠点となる施設を目指す」とあり、それぞれの施設で地域に貢献するための取り組みを行っています。

本稿では、そのうちの1つとして、京都府福知山市に所在する岩戸ホームと地域自治会等が連携した取り組みを紹介いたします。

岩戸ホームは、昭和50年に軽費老人ホーム（B型）を開設し、それから4年後に特別養護老人ホームを併設し、今日に至るまで、地元行政、自治会等のニーズにより、必要とされる事業を拡大してきました。

社会福祉法人成光苑 岩戸ホームの概要

軽費老人ホーム（B型）
　昭和50年8月 開設（定員50名）
特別養護老人ホーム
　昭和54年4月 開設（定員50名）
　昭和62年4月 増床（定員80名）
ショートステイ
　昭和54年4月 事業開始（定員4名）
　平成 6 年4月 増床（定員7名）
ホームヘルプ事業
　平成 6 年4月 事業開始
通所介護（デイサービス）
　平成10年4月 事業開始
在宅介護支援センター
　平成10年9月 開設
訪問看護ステーション
　平成12年4月 開設
居宅介護支援事業所「けあ・おふぃす舞」
　平成17年4月 開設
小規模多機能型居宅介護「あっとホームらく楽」
　平成18年4月 開設（定員25名）

地域における課題

岩戸ホームがある金谷地区では、人口は減少し、高齢化率は年々増加しています。平成13年（2001年）には高齢化率が25％を超えました。

自治会、民生・児童委員と、地域の課題について話し合う場において、1人暮らしの高齢者の増加に伴う生活の安全確保が課題としてあがりました。また、近隣に診療所がないため、地域住民は遠方の市民病院へ通院していましたが、車両を保有しない世帯が増加し、路線バスの運行が減少するなか、高齢者の通院の交通手段の確保が課題としてあがるようになりました。さらに、高齢者の生きがい支援も課題としてあがるようになりました。

年	人　口	高齢者人　口	高齢化率	一人暮らし高齢者	備　考
1980	1，454	229	15．75	－	79年特養開所
1985	1，512	241	15．94	－	
1990	1，417	280	19．76	－	
1998	1，318	298	22．61	－	デイサービスセンター開所
2001	1，274	323	25．35	28	福祉バス、緊急通報
2009	1，094	358	32．72	32	08年陶芸教室

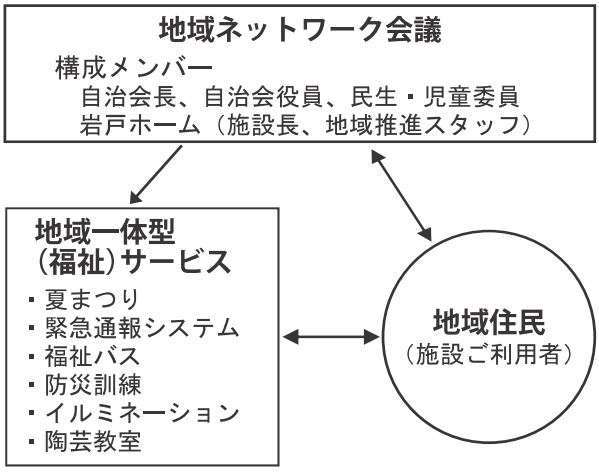
金谷地区の人口推移

地域への働きかけ

当施設の開設当初は、隣接する団地が開発されて日が浅く、福祉施設への関心が薄かったため、地域との関係も一からのスタートでした。施設への理解を深めていただくために、また、地域の一員として活動ができるようになるために、地域行事への参加や施設のオープン化に重点を置いて取り組みを進め、今では、自治会と一体になって様々な問題を検討する「地域ネットワーク会議」が開催されるまでになりました。

地域ネットワーク会議
～地域の具体的なニーズの把握～

自治会長、民生・児童委員、自治会役員、岩戸ホーム（施設長、地域推進スタッフ）で構成される「地域ネットワーク会議」では、年間行事はもちろんのこと、ゴミ分別問題、子どもの安全見守りのあり方、高齢者生活問題等、少子高齢化に伴う様々な問題について多く意見交換しています。地域ニーズはそれぞれの生活の中にあり、施設は地域の中での役割があることを実感しています。



地域ネットワーク会議

会議の中で取り上げられる問題の多くは、高齢化に伴う生活問題です。高齢者が「安心」して地域で暮らせるよう、当施設が地域において高齢者を支えていく役割を検討しています。

地域と施設それぞれが持っているパワーを提供しあい、一体となって実践していける「地域一体型福祉サービス」に取り組んでいます。

次項にて、具体的な実践について述べたいと思います。

地域との連携に基づく活動
（具体的な実践）

（1）緊急通報システム

「福知山市１人暮らし緊急通報システム」は、市内の１人暮らしの高齢者や高齢者のみの世帯、高齢者と障がい者のみの世帯や障がい者のみの世帯に、緊急時の連絡用として発信機を設置し、発信者からの非常信号を、電話回線を利用して、第１受信者、第２受信者、消防署という順で送信するシステムです。この第１受信者の役割を、岩戸ホームで担っています。

当システムの受信者は、これまで、第１・第２受信者とも、近隣の方や民生委員が主な役割を担っていましたが、岩戸ホームでは、24時間365日、必ず職員を配置し、通報を受信し、

自宅に出向き、状況確認ができる体制を整えています。

発信機のボタンが押されると、岩戸ホームの事務所に電話が入ります。

施設から住宅地の一番先まで400メートルのため、車なら2分（徒歩でも5分以内）で行くことができます。

事業の経緯としては、平成12年9月に、ネットワーク会議でニーズを把握してから、同年10月～13年2月に、地域住民に対して、受信の受け皿機能を担う体制があることを説明しました。

平成13年に、施設独自でモデル事業を実施し、24時間365日、必ず自宅に出向き、状況確認ができるという施設機能を理解していただくように努めました。

モデル実施以降、ニーズはありませんでしたが、定期的に、受け皿施設に成り得る体制があることを地域住民に伝えておりました。

このような働きかけの結果、平成20年8月に、施設に隣接する鴨野町の民生・児童委員から、福知山市1人暮らし緊急通報システムの受信を岩戸ホームで担って欲しいという依頼を受け、市と協議し、同年11月に、法人が受信者になることを了承する旨の通知を市から受けました。これは、福知山市内唯一の法人登録となります。その後、平成21年1月に第1号契約、平成22年7月に第2号契約を結んでいます。

約20年間、受信者を個人限定にしていた市のシステムから比べると、法人が受け皿となることにより、受信者不在という状況を防ぐことができたことには意義があると考えています。

（2）無料福祉バスの運行

前述のとおり、高齢化、路線バスの縮小、地区に診療所がないことが当地域の課題でしたが、施設においても、「軽費老人ホーム入居者

福祉バス（平成13年度～15年度）
通所バス・3往復運行

（乗客数）

年 度	平成13	平成14	平成15
全 体	1,331	1,338	2,052
鴨野町	680	788	1,459

福祉バス（平成16年度～）
29人乗専用バス・4往復運行

（乗客数）

年 度	平成16	平成17	平成18	平成19	平成20	平成21
全 体	3,043	4,488	5,328	6,379	6,313	5,778
鴨野町	1,937	2,938	2,962	3,866	3,723	3,451

の通院は、ご家族かタクシー、路線バスによる送迎しかなく不便や負担が大きい。また、食料品の購入は移動購買車に頼っているが、ショッピングセンターへの買い物希望者が増えている」「平成10年にデイサービスセンターが開所したが、送迎バスが稼働していない時間の有効活用ができないか」という要望と課題提起がありました。

そこで、地域ネットワーク会議で福祉バスの運行を協議し、平成13年3月にモデル事業を行い、同年4月に、通所バスとの兼用という形で運行が始まりました。平成16年4月からは、29人乗りの専用バス（日本財団より助成）にて運行しています。

現在は、施設・ショッピングセンター・病院・市役所の間を、1日4往復（月曜日～土曜日）運行しております。年間延べ6,000人の送迎を行い、地域の足として定着しております。乗客の6割は、当施設に隣接する鴨野町の高齢者であり、乗客数の推移は、ニーズ把握にあたり注目しているところです。

また、福祉バスで対応できない方の送迎のために、平成18年度より福祉有償運送事業も実施しています。市と協議のうえ、市内で最も安価な金額で運行しています。

（3）地域一体型事業

①鴨野町夏まつり

平成9年8月より、地域と共催で夏まつりを開催しています。地域と施設が共催することで、「資金」と「マンパワー」、「設備・備品」とメリットが多く、特に協賛金で打ち上げる「大花火」は、単独では実施できません。地域、施設ご利用者、職員にとってなくてはならない事業となっています。

この夏まつり実行委員会があるからこそ、様々な「地域一体型事業」ができていると言っても過言ではありません。

夏まつり

②かもの工房（陶芸教室）

平成12年頃から、「住宅地の中心で、地域住民が集える場を持てないか」と、自治体等と協議していましたが、当時は、特に陶芸に絞っていたわけではありませんでした。

その後、地元高齢者、施設ご利用者の生きがい支援として、陶芸教室を開催してはどうかというアイデアがあがりました。

地域における課題として、①前期高齢者の増加、②地域で活動する場所が少ない、③新たな自治会員や児童・若年者層との交流が希薄に

陶芸教室

なってきている、④新しい事業を立ち上げるにあたり、担当者の確保が困難であり、会計や運営などの事務方がいない、といった点があがっていました。

一方、施設側の課題として、①施設入居者と地域高齢者との接点が少ない（これまで夏祭りなどの行事のみが接点であった）、②指導者の確保が困難であり、陶芸経験者が少ない、があがりました。

事業は、岩戸ホームと自治会が共同で運営していくこととし、「平成19年度京都府地域力再生プロジェクト交付金」を受け、施設の寮に電気窯を設置しました。平成20年2月に施設職員・自治会役員が教室運営のための研修に参加し、備品準備や指導者の育成等を経て、同年9月に「かもの工房」をオープンし、本格的な運営を開始しました。

教室は毎月1回開催され、「オリエンテーション」「成形（削り）」「素焼窯入れ」「釉掛け」「本焼窯入れ」「本焼窯出し・合評会」の工程で行います。主な参加者は、地域高齢者、施設入居者、地域児童、地域高齢者の家族で、参加者数は、年間100名以上となっています。

また、教室開催に留まらず、陶芸作品展示や陶芸販売を行い、参加者のモチベーション維持にも努めています。

年間を通して陶芸教室があることにより、徐々に地域活性化が図られてきていると感じます。

③かもなりえ（街いっぱいイルミネーション事業）

平成16年から、冬の寒空に安堵感をもたらすためのイルミネーションを呼びかけ、当施設を含め地域全体に広がっています。「かもなりえ」と名付けられ、点灯式には、地域と共同で出店するなど福知山近隣の冬の風物詩になっています。

かもなりえ（岩戸ホーム）

④おたっしゃ会（自治会敬老会）

自治会敬老会が主催する「おたっしゃ会」では、自治会役員で結成された「鴨野笑劇団」が、会を盛り上げます。当施設職員も「岩戸バレエ団」「岩戸カラガード隊」など一芸で参加させていただいています。ここでも、職員との顔つなぎの機会をつくっていただいています。

おたっしゃ会

（4）災害や不測の事態に対する連携（地域協働防災訓練）

平成16年10月24日、台風23号が近畿北部を襲い、大きな被害をもたらしました。その時の、「大規模災害時には施設単独では何もできない」「公的支援も受けることが困難である」と

いう教訓が、地域と協働した防災を本格的に考えるきっかけとなりました。

平成18年9月、初めて自治会と当施設協働で防災訓練を実施し、以降、年1回実施しています。訓練は半日をかけています（内容は下記参照）。指導には、自治会役員メンバーで構成する「かものレスキュー」と当施設の職員があたります。また、訓練も地域住民と職員が共に手をとりあいながら実施しています。

今年で5回目の訓練を実施し、地域住民200名以上の出席をいただいています。回を重ねる毎に出席者数も増え、防災意識の高まりを感じています。今後も、課題を整理しながら、継続して協働防災訓練を実施していきたいと考えています。

訓練内容

1　本部初動対処訓練（緊急連絡・災害対策本部設置）
2　避難誘導訓練及び報告（組の異状の有無）
3　各種対応（実技）訓練
(1)　負傷者搬送訓練（各種搬送法・要介助者等）
(2)　応急救護訓練（止血法・骨折）
(3)　各種救助機材の取扱い要領及び実技訓練
(4)　消火栓・器具の設置場所の確認（訓練終了後）
4　総合訓練（消火・捜索・救出・搬送・救護）
5　防災講座（防災知識・防災備品等）

防災訓練

事業推進にあたっての工夫、課題

地域の関係機関・団体との連携による取り組みを紹介させていただきましたが、「少子高齢化により過疎化していく地域をどうしていくのか」また、「安心して暮らせるために何ができるのか」といった課題を真剣に議論できる自治会と、そのことを共有し地域の拠点施設として取り組む施設の考え方が、大変重要であることを実感しております。

そのことから考えても、高齢化が進むなか、自治会においては役員の維持と次世代育成、施設においては地域連携の意義を十分理解し推進していける「人財」の育成が今後の課題であると思っています。

おわりに（今後の展望）

地域ネットワーク会議のなかで「高齢になっても、障がいがあっても、安心して暮らせる町」をスローガンとし、楽しみや生きがいを目的とした健康管理事業の拡大や、「人財」育成を目的としたふれあい交流事業の拡大が検討されています。例えば、一軒家を個室、集会所をリビングに見立て、この町全体を1つの施設として考えたなら、私たちの任務は地域の中にも大きな役割があると思います。そのことを十分理解し、この地域が福祉のモデル地域として進んでいけるよう、地域と施設が一体となって今後も努力していきたいと考えています。